緊迫する世界

川上高司

▶4◀

日米露の協調で中国抑止

安倍・プーチン会談にも追い風

「ストリートファイター」の反乱分子が、米国大統領になった」

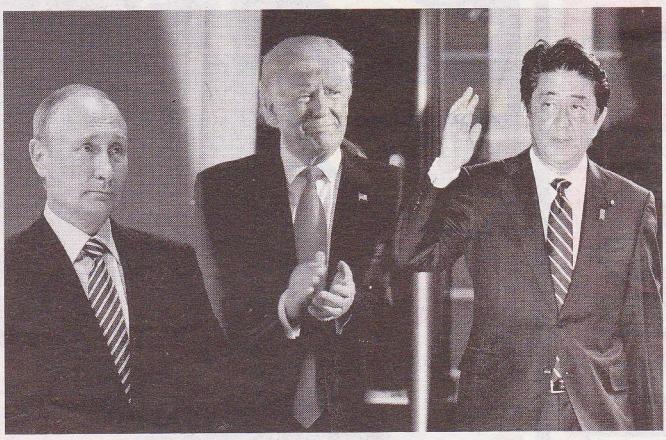
英BBC放送はこう伝えた。

ドナルド・トランプ氏は世界を破滅に導くのか、新たなパワー・バランスの変化をもたらすのか―。米国の影響力は絶大であるがゆえに、トランプ氏の一挙手一投足を世界中が注目する。トランプ氏の大統領選勝利で株価は大暴落した。だが、トランプ氏が勝利演説でまともな演説をすると株価は一気に戻した。

「トランプ大統領」の登場を待ちわびていたのがロシアである。

ロシアは、シリアをめぐって米国と最悪の関係にある。シリアのアサド政権の後ろ盾であるロシアに対し、米国は反体制派を擁護している。停戦合意期間中、米軍はシリア軍を誤爆した。それを機にロシアはシリアに地対空ミサイル「S300」を配備し、軍艦3隻を派遣している。

クリミア問題でも、米国は経済制裁をロシアに加えてきた。その冷え切った米露関係を打破するトランプ氏が、次期大統領に選ばれたのである。ロシアのプーチン大統領はトランプ氏の当確が出るとすぐ、「米国との関係改善を望む」とラブコールを送った。



（左から）プーチン大統領、トランプ氏、安倍首相で対中包囲網を形成するか（写真は合成、AP、ロイター）

米露が大きく接近すれば、世界の紛争はほとんど解決可能となる。「核のない世界」も夢ではなくなる。その状況を一番利用できるのは日本である。米露の接近、それは日本にとって、またとないチャンスである。

それを見極めて、安倍晋三首相は素早く動いた。トランプ氏と17日にニューヨークで会い、きびすを返して12月15日に日本でプーチン大統領と会談する。トランプ氏の来年1月の就任式までは「プーチン・トランプ会談」はないという。

もし、ヒラリー・クリントン氏が当選していれば、米国の反対を押し切っての日露首脳会談となっていただろう。

だが、今回はトランプ氏が最も頼りにするプーチン氏と会談するのだから、米国にサポートされての会談となる。北方領土交渉の進展が大いに期待できる。

米露が接近し、同時に日露関係が深化して「日米露の協調関係」ができあがれば、中国に対する大きな抑止となる。自衛隊も「北」から「南西」へと安心してシフトすることが可能となろう。

ただ、日露接近に、中国は不快感を持つだろう。中国は、沖縄県・尖閣諸島周辺に数多くの漁船や警備船を送り込み緊張を一気に高め、日本や米国の出方を探るのではないか。

緊迫した世界は、日本にとっては千載一遇のチャンスとなる。安倍政権は戦略的思考で外交政策を展開し、いかに毅然とした態度で日本の防衛に臨むことができるか―。そこに日本の生き残りがかかっている。

かわかみ・たかし　1955年、熊本県生まれ。拓殖大学海外事情研究所所長。大阪大学博士（国際公共政策）。フレッチャースクール外交政策研究所研究員、世界平和研究所研究員、防衛庁防衛研究所主任研究官、北陸大学法学部教授などを経て現職。著書に『「無極化」時代の日米同盟』（ミネルヴァ書房）、『「新しい戦争」とは何か』（同）など。